

## ペテロの手紙第一2章「光の中への召し」

### 1A 祭司の務め 1-10

1B みことばによる成長 1-3

2B 霊の家 4-8

3B 神の民 9-10

### 2A 旅人にふさわしいふるまい 11-20

1B 立派なふるまい 11-12

2B 人の制度の敬い 13-17

3B しもべの服従 18-20

### 3A キリストの足跡 21-25

1B 正しく裁かれる方 21-23

2B 義に導かれた方 24-25

## 本文

ペテロの手紙第一2章です。私たちは前回、2章2節まで見ましたが、改めて1節から読んでいきたいと思います。

### 1A 祭司の務め 1-10

1B みことばによる成長 1-3

<sup>1</sup> ですからあなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、  
<sup>2</sup> 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

前回私たちは、生ける望みが与えられたことを学びました。それは、イエス様の十字架の血によって洗い清められ、よみがえりによって新しく生まれた私たちが、イエス様の再臨によって救いを得るという望みです。すでに救われていますが、主が現れてくださることによって、その救いが完成します。その間まで、私たちがどのように歩むべきかを、ペテロは教えました。その中の一つが、真理のことばによって清められ、偽りのない兄弟愛を抱きなさい、というものです。

互いに愛し合うというのがイエス様の命令ですが、それは、真理のみことばによって心が清められることによって抱くことができます。そこで、この勧めになるのです。私たちの生きている世は、悪意、偽り、偽善、妬み、悪口に満ちています。キリスト者がそれらに染まってはいけません。私たちは、このような空しい生き方から、イエス様の血によって贖い出されたからです。聖なる神に倣って、聖なる生活をしなければなりません。

しかし、いろいろな圧迫や試練、迫害の中にいると、敵は悪魔なのに、兄弟たち、仲間にその苦しみのほけ口にしてしまいます。イエスが地上におられた一世紀のユダヤ人たちは、その傾向が非常に強く、エルサレムがローマによって破壊された時に、ローマ軍によって殺された人々よりも、ユダヤ人が仲間を殺したほうが多かったと言われます。

そこで大事なものは、みことばを乳を赤ん坊が飲むように、強烈に慕い求めることです。そこに、自分の思いと心を傾けるべきだということです。世の中の流れはどんどん変わりますが、みことばは永遠に変わりません。人の栄えは草のように、すぐにしおれるけれども、みことばはいつまでも、堅く立つと、1章の最後に書いてありました。そのことによって、霊的に成長します。そうすることによって、いろいろな困難や苦しみがあっても、正しく対応することができます。

<sup>3</sup>あなたがたは、主がいつくしみ深い方であることを、確かに味わいました。

主が大いに憐れんでくださって、私たちは救われています。その、いつくしみ深さを味わっています。だからこそ、主の良きものの中で、私たちが霊的に育てられていこう、とペテロは言っています。

## 2B 霊の家 4-8

そこで、ペテロが次から、大きな勧めを行っていきます。それは、その、いつくしみ深い主のところに行こう、ということです。主の前に出ることです。それを、言い換えると祭司の務めです。イスラエルの民の中から、祭司が選ばれました。そして、幕屋や神殿の聖所の中に入りました。

<sup>4</sup>主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。

なぜ主のもとに来るのか？と言いますと、この方が、石だからです。石といっても、生ける石です。死んでもよみがえってくださり、今も生きておられる方です。そして、この方は尊いです。ペテロは、尊いということばを多く使います。イエスの流された血を、「銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と言っていました(1:18-19)。イエス様が、みなさんにとって尊いものになっているでしょうか？

ところで、石また岩、また巖という表現が、聖書には数多く出てきます。そして、その多くが、主ご自身を言い表す言葉として出てきます。岩や石という存在は、イスラエルの地域にとってありふれたものです。石や岩だらけであります。その中で、岩というものがいつまでも続くもの、変わらないものという意識が強く残っています。地域が乾燥しているのも、いつまでもそこに存在しているからです。モーセはこのように歌いました。「申命 32:4 主は岩。主のみわざは完全。まことに主の道はみな正しい。主は真実な神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」

そして、敵が来た時に隠れることのできるどころ、自分を守り、助け、救ってくださる方としても、岩という言葉を使っています。「詩篇 71:3 私の避け所の岩となってください。いつでもそこに入れるように。あなたは私の救いを定められました。あなたは私の巖 私の砦なのです。」

この、頼るべき方、救ってくださる方が、後に大きな山となるという預言もあります。山は、王の主権を表しています。ダニエル書 2 章からです、「2:34-35 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。」

そして、主イエスは、ペテロに対して、彼の信仰告白に基づいて教会を建てることを宣言されました。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」岩のギリシア語は、「ペトラ」です。ですから、ここは、掛詞になっています。あなたはペトロです、わたしは、このペトラの上に、わたしの教会を建てます、ということです。ペテロは、小石のことです。ペトラは、大きな岩で、ここでは、ピリポ・カイサリアにある、ヘルモン山のふもとにある崖のことを指していると思われる。ペテロはとても小さい存在ですが、彼が告白したのは、「あなたは生ける神の子キリストです」だったのです(16:16)。

ですから、この方は尊い、生ける石です。そして、この方は「人には捨てられたが神には選ばれた」と言っています。イエス様は捨てられました。弟子たちに対して、バプテスマのヨハネが、ヘロデによって斬首刑にあったことを言及して、ご自身も同じ仕打ちを受けるようになるかと語られました。「マタ 17:12 しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることになります。」(このエリヤとは、ここではバプテスマのヨハネのことです)

人々からは捨てられていますが、神には選ばれた方なのです。預言者は、メシアのことを、神の選ばれたしもべとして預言していました。「イザ 42:1 見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。」そして、そのことを持って、父なる神は、イエスが高い山で姿を変えられた時に、雲の中から弟子たちに声をかけらえたのです。「ルカ 9:35 これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」

この、人々には捨てられても、神には選ばれたという方だというのが、キリストに従う者たちも、同じなのだよ、というのが、ペテロが、これから話していくことです。キリストにあって私たちは選ばれた者たちで、神からは尊いとみなされますが、人々からは疎外されるのだということです。

<sup>5</sup> あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。

私たちが、生ける尊い石である、主のもとに来るとき、すなわち礼拝を献げる時に、私たち自身も、生ける石として霊の家に築き上げられるということです。ユダヤ人たちは、石を積み上げることによって神殿を建てました。そこに主が住まわれました。けれども今は、聖霊が信じる者たちの間に住んでくださり、それによって、私たち自身が、神の御霊が宿る神殿になります。(エペソ 2:20-22 参照) 私たちは、自分の信仰がこの方に築き上げられる必要があります。

先週、すばらしい証しを聞くことができました。それは、自分の信仰が弱かったことを、ご自身のお父さんが、一度、死んだのに、次の日に蘇生して、その時にイエス様を受け入れた証を聞きました。そして次の日にお亡くなりになりました。彼は、自分の父は、絶対に信じない、頑ななのだと思っていました。しかし、神に不可能はないという信仰がまだなかった、と打ち明けていましたね。その時に、何度も語ってくださったのが、「信仰が建て上げられる」という言葉です。

そして、「神に喜ばれる霊のいけにえ」と言っていますが、これはもちろん、感謝や賛美のいけにえのことです。また、自分自身を主に献げて奉仕することも、いけにえですね。(ロマ 12:1) そのことによって、「聖なる祭司」となるのです。礼拝において、傍観者はいません。すべての人、信じる人に、御霊による祭司の務めがあるのです。御霊の導きにとても敏感になって、導きがあることに、信仰をもって思い切って、行うことです。祈りが必要だと感じる人に、手を置いて祈ります。主に何か語られたと思ったら、思い切って語ります。もちろん、秩序をもって行います。

<sup>6</sup> 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は 決して失望させられることがない。」

ペテロが引用した、この箇所はイザヤ 28 章 16 節からのものです。ユダ王国が、アッシリアに攻め取られていて、エルサレムにも差し迫っている時に、ひそかにエジプトとの同盟を結んでしまいました。しかし、それは何の役に立たないことを、主は警告されます。その中で語られた言葉です。自分たちが今いる、エルサレムを住まいとする方こそ、自分たちを救ってくださるということです。この方に信頼するならば、決して失望しません。私たちも、当時のユダのように、主に信頼するといながら、同時に、他の世のものに信頼しているということがないでしょうか？

そして、ここで、「尊い要石」とあります。要石は、建築物で、その石が取り除かれたら、建物全体が崩れ落ちるほど、要になっている石のことです。アーチでは、そのとがった部分、最も高いところにある石が、要石になります。建物では、隅の部分が要石になることが多いです。

<sup>7</sup>したがってこの石は、信じているあなたがたには尊いものですが、信じていない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」のであり、<sup>8</sup>それは「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからであり、また、そうなるように定められていたのです。

7 節に引用されている詩篇 118 篇 22 節にある言葉は、主ご自身も、また使徒たちも数多く引用しました、有名なメシア預言です。背景にこんな話があります。ソロモンの神殿を建てている時、石の切り出しと、その石を削る作業は神殿の現場で行われるのではなく、別の場所で行ないます。したがって神殿では、ただ石を置いていく作業だけで、音が聞こえませんでした。それで、どこの場所にどの石を当てはまるか、番号か印を付けたのでしょう、石を現場に運び出す時に付けました。そして要石があります。それを現場にまで運んだら、どこに行くのか分からなかった。それがお粗末に見えたので、草むらに捨てて置いたというのです。

それで、ついに要石を入れる時が来ました。この大事な石があるからこそ、建物全体が成り立っているのですが、それが見つかりません。捜してみたら、実は捨てられていた石が要石だった、というのです。そこから、ユダヤ人の宗教指導者がイスラエルの家を霊的に建てているはずなのに、肝心の要石であるメシアご自身を捨ててしまった、という逆説です。

そして、その要の石を捨ててしまうような者にとって、その石は、「つまずきの石、妨げの岩」になるということです。自分がその石を捨てても、それでその石がなくなるわけではなく、自分自身がつまずいてしまいます。これは、イザヤ 8 章 14 節にあります。イザヤが、インマヌエル預言を行いました。アハズ王に対して、主を試しなさい、イスラエルとアラムはあなたがたを襲うことはない、と説いたのにも関わらず、アハズはそれを信じませんでした。代わりに、アッシリアに金を払って、攻めてもらおうようにしました。すると、アッシリアはアラムとイスラエルを倒したのですが、それだけでは終わらず、ユダも虐げ始めたのです。

このように、みことばに従わないことによって、自分自身が傷を受けます。そして、従わなければつまずく、というのは、神の定めです。神が、みことばによって私たちを、まっすぐな道に導かれるからです。キリストの証しやみことばについて、あからさまに否定したり、攻撃的になっている人が、どんどん惨めになったり、おかしくなったりしていくのを、何度となく見てきました。キリストの石は、信頼する者には救いになりますが、捨てる者にはつまずきの石になるのです。

### 3B 神の民 9-10

<sup>9</sup>しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。

午前礼拝で、ここの部分をじっくり学びました。私たちが、何に召されているのかを、はっきり教えてくれている箇所であり、私たちの使命を明確にすることは、非常に大切です。これは元々、イスラエルの民に対して、神がシナイ山において宣言された召命でした。今は、キリストにあって異邦人にも与えられている召命です。

一つは、選ばれているということ。これは、1章の挨拶ですでに、キリストに従うように、その血の注ぎかけを受けるように選ばれたということを話していました。ここでは、それが「種族」と訳されているように、大きなグループとして描かれています。私たち個人が選ばれただけでなく、むしろ、キリストにある者たちなのだ、大きな家族なのだということなのです。今日、悪い意味の個人主義がはびこっていて、キリスト者でも信仰を個人の修養だと思っている人があまりにもいます。一人一人とのつながり、また大きく、広いつながりによって、選ばれているのだという意識が必要です。

次に、「王である祭司」です。祭司は、主に仕えている者たちであり、まだ神を知らない人々に、神を知らせる仲介者であります。祭司たちが集まり、主に仕え、人々にも仕えている中で、王なる神がその人々に支配が広がるようになります。このようにして、神の国が広がるのです。いわば、礼拝王国と言ったらよいでしょうか？その礼拝王国に、人々がなるべく入ってくるように、神に仕えるのが祭司とあってよいでしょう。

そして、「聖なる国民」です。神のために聖め別たれているのです。ですから、私たちが、世と調子を合わせることはないのです。イスラエルの場合は、食べるものが汚れたものは食べないということで、聖なる民であることを示すように命じられました。世にあるものから別たれている国民なのだということです。

そして、神のものとされた民です。イエス様の尊い血によって、買い取られました。自分たちは、もはや自分のものではありません。神の所有になっています。

そして、私たちが、このように召されているのは、「あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった」とあります。キリストを知ることによって、私たちは光になりました。パウロが、ヘロデの前で証しをしています。復活の主が、パウロに語られました。「使 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」

そして、このことを「**告げ知らせる**」とあります。私たちは言葉によっても告げ知らせますし、行動によって告げ知らせます。あなたがたは世の光であるイエス様が弟子たちに言われた時に、「**明かりをともして升の下に置いたりはしません。燭台の家に置きます。**」と言われましたね（マタイ 5:15）。人に良く言われたり、思われたりしたいと思って、見せるのは間違っていますが、同時に、

キリストの証しを見せていくことは、とても大切です。

<sup>10</sup> あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。

これはホセア書 1 章に使われている言葉です。イスラエルが神を拒み、遠く捕囚の民となっていたところで、神はそのようにして彼らを引き離したけれども、再び神の民として引き戻す、その憐れみを言い表している言葉であります。

ユダヤ人にとっては、イエスを知ったことによってそのことを実感したことでしょう。事実、すでに神の民なのですが、その方に立ち返りました。そして異邦人は、初めは神から遠く離れていましたが、イエス・キリストによって憐れみを受けたのです。神に近づけられました。

## 2A 旅人にふさわしいふるまい 11-20

このようにして、神の民としての召命を受けています。その召命に応じて、私たちは地上での歩みをするのです。この召命観がとても大切です、自分の意欲で信仰は持てません。主に呼ばれたから、初めて信仰で歩むことができます。

## 1B 立派なふるまい 11-12

<sup>11</sup> 愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

愛する者たちと、兄弟愛を持って、呼びかけています。この世において、私たちは、旅人、寄留者です。(1:17)この手紙を受け取っているのは、アジア地方にいる離散のユダヤ人たちが多かったのですが、ユダヤ人も異邦人も、イエスを信じるならば故郷は天にあります。ですから、この世にあるものに対して、自分がここにそぐわないという感覚はいつも持っているのです。

そして、持たないといけません。「たましいに戦いを挑む肉の欲」を避けなさいと言っています。肉の欲は、私たちのたましいが、かき乱されることによって駆り立てられます。思いの中で、戦いがあります。「ロマ 8:6 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。」心を見張りなさいと、箴言には書かれています。「4:23 何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」

<sup>12</sup> 異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。

彼らは、アジア、今のトルコ地域にいますから、自分たちの住んでいるところは、異邦人が多数派であり、異教とその慣わしに取り囲まれています。私たちがトルコ旅行に行って、エペソの遺跡を歩いていた時に、大きな通りの地面には、ハートマークがあって、女性の顔の落書きがあり、こちらへどうぞと案内しているものでした。遊郭です。しかも、遊郭の真正面には、ローマ帝国でも有数の図書館があります。ですから、肉欲を刺激するものに満ち溢れているのです。

そんなことで、聖なる国民として生きる時に、これらのものを避けて行きます。ここには、自分は属していないことを示していきます。そうすると、神を知らない異邦人たちが不審に思って、中傷するのです。それでも、立派にふるまいなさいということです。

私たちは地の塩なのだ、イエス様は言われましたね。煙たがられるのですが、いざという時は助けを求めるのです。そして、いつもは頼んでいるものも、いざとなったら役に立たないことも知っているのです。牧者チャックのお父さんは、イエス様を伝えることに積極的だったそうです。だから、彼のことを小ばかにする人々がいたのですが、自分たちが、例えば娘が重い病気になった時には、祈ってほしいとお願いしてきたそうです。

そしてこの、「神の訪れの日」というのは、イエスが来られて、すべての者が裁かれる日のことを指しているのでしょう。しかし、その時に、神をほめたたえるようになるということです。つまり、救われるということです。

## 2B 人の制度の敬い 13-17

このように、私たちは、主の現れの恵みを、ひたすら待ち望むと同時に、祭司の王国としての召しを受けているのですから、この地上にいる間、しっかりと人々に関わっていくのです。立派な行いを見せていくのです。そして次は、人の制度に対してどう接していくかについて見ていきます。「従う」ということです。

<sup>13</sup>人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、<sup>14</sup>あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。

この手紙を受け取っている人々が、ローマ帝国にいて、しかも、迫害の手が伸びている時であります。ペテロ自身が、おそらく都ローマで、苛烈な迫害を見ている中で書いています。ローマに対抗し、抵抗することこそが徳であると、ユダヤ人は思っていました。しかし、従いなさいとペテロは勧めるのです。ユダヤ人たちが反ローマの感情に満たされている時に、イエス様が来られたのを思い出してください。イエスは、敵をも愛しなさい、祈りなさいと言われました。ローマには従いなさいというメッセージなのです。そして、弟子たちには、自分の十字架を背負いなさいと教えられました。

た。十字架こそが、ローマの主権に屈服する象徴なのです。

ですから、ペテロは主イエスの教えを、人々に伝えているのです。ローマ皇帝のような王であっても、また、行政官である総督であっても、従いなさいと言っています。しかし、自分たちの心にある良心、イエスのみが主であるということに直接、抵触するようなことに対しては、立てられた権威を恐れ敬いながら、良心に従いますね。初代教会のキリスト者は、皇帝礼拝には関わらなかったもので、迫害を受けました。けれども、その他のことについては、ローマ政府がいかにか、キリストの教えと真逆のことをやっていたとしても、その制度に従ったのです。

これでは、神の国が広がらないと思う方がおられるかもしれません。いいえ、その逆なのです。それは、まるで向かい風があるからヨットが前に進むように、従うからこそ、神の国がより広がるのです。ローマは、反政府運動をしている分子は潰すことができました。ユダヤ人も、ユダヤ反乱の独立戦争をしたので、押し潰すことができました。けれども、キリスト者は反抗しなかったのです。従いました。だから、弾圧のしようがなかったのです。むしろ、その立派な行いを見て、一部の人たちは尊敬さえしていたことでしょう。そうやって、人々の間に信仰が広がっていきました。

民主主義国の中に生きる私たちは、古代ローマにある専制とはまるで違う制度に生きています。民が主権者ですが、ローマは皇帝が主権者です。ですから、私たちは日本国民として、政府を監視すべきであるし、必要ならば声を挙げるべきであるし、選挙という手段で主権を行使すべきなのです。けれども、キリスト者はそれだけではないのです。むしろ、執り成しの祈りに専念すべきなのです。政治の信条としては、相いれない人であっても、全く関係ありません。私たちが、自分の考えと違う人に、考えが違うからといって、伝道を控えますか？いいえ、違いますね。それと同じです。自分の支持している政党でなくても、立てられている人を祝福し、祈るのです。

<sup>15</sup> 善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることは、神のみこころだからです。

キリスト者が、反ローマであるという中傷が行われていたのでしょう。けれども、しっかりと従うことによって、そうした愚か者の発言を封じることが、みこころだということです。日本ではどうでしょうか？キリスト教は戦争をするからいやだ、というような、そしりを受けます。そういった人に、いつも優しく、私たちの希望を説明すればよいのです。私はあっさり、過去のキリスト教の名で行われたことは、本当に愚かだったと言ってしまいます。そうやって、優しく接して、その平和な姿を見て、そのそしりが、いかにか、その中傷が愚かなのかを示すことができます。

<sup>16</sup> 自由な者として、しかもその自由を悪の言い訳にせず、神のしもべとして従いなさい。

これは、キリスト者の原則的な生き方ですね。神とキリスト以外は、すべてのものから自由にさ

れています。けれども、自由にされているからこそ、縛られてではなく、愛のゆえに、人々に仕えることができるのです。パウロは、「ガラ 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」

イエス様とペテロの会話を思い出します。神殿税を徴収しに、人がペテロの家に来ました。そのお金がありません。それで、ペテロはイエス様に相談しました。とてもユーモアのあるものです。「マタ 17:25b-27 そして家に入ると、イエスのほうから先にこう言われた。「シモン、あなたは どう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。」ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「しかし、あの人たちをつまずかせないために、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」

私たちは王である神の子どもたちなのだから、神殿税なんて払わなくていいんだよ、と、余裕をかましておられます。でも、つまずきになるから、釣りでもして納めなさい、と仰っているのです！ 私たちは、この世のことについて、ここまで自由で、縛られていないのです。それだけの大きな恵みを受けています。けれども、だから税金を納めなくてよいか悪の言い訳をしなくて、しっかりと、神のしもべとして従いなさい、ということです。

<sup>17</sup> すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。

これが、キリスト者の基本的な姿勢です。基本、すべての人を敬うのです。敬意を払うのです。失礼な態度は、キリスト者からは無縁なのです。それが、たとえ自分と考えの全く違う人に対しても、そうなのです。そして、兄弟を敬います。同じキリスト者ということで敬意を払うのです。

そして、その敬意を、「神を恐れ、王を敬いなさい。」につなげるのです。ここで大事なのは、神を恐れて、王を敬うという順番です。神が王を立てられたということで、神を恐れるがゆえに、王を敬います。もし、その神を否むようにして、王を敬えと言われたら、つまり王が現人神のように信仰しなさいというような偶像礼拝を強要するならば、神を恐れるゆえに、それを拒みます。けれども、基本は、神を恐れるから、王を敬うのです。

### 3B しもべの服従 18-20

そして、人の立てた制度の延長として、しもべたちが主人に従いなさいという勧めがあります。

<sup>18</sup> しもべたちよ、敬意を込めて主人に従いなさい。善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。

ローマ社会では、自由人よりも奴隷の方が多かったと言われています。奴隷制度は、悪いものです。けれども、その不条理の中にあっても、敬い、従う姿勢を取ることによって、逆に、キリストにある自由を発揮するのです。主人に従うのは、奴隷は、見せかけですることが多かったことでしょう。けれども、敬意をこめて従いなさいとペテロは勧めます。自由だからこそ、その権利をキリストを示すのに用いることができるのです。従うことで、示すことができます。

大事なのは、ここでその主人が良い人だから、従うのではないということです。意地悪な主人にも従いなさいとペテロは言っており、主人が主人であるのは、神が立てておられるというところに立脚しています。ここが、ペテロの第一の手紙では大きなテーマの一つになります。キリストのゆえに苦しみを受けるのであれば、それは良いことなのだとということです。

<sup>19</sup> もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。<sup>20</sup> 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。

奴隷の場合、その使役の過酷さから、罪を犯すことは多々あったことでしょう。盗みであるとか、逃亡であるとか、そういった類の罪です。それによって、厳しいむち打ちや、焼き印がありました。もし、そうしたことで苦しみを受けても、そこには誉れがありません。けれども、もし不当な苦しみであれば、どうでしょうか？特に神の御前の良心があって、その両親を汚すまいとして行ったことで、そのような仕打ちを受けたらどうでしょうか？同じ苦しみなのですが、その時は、神に喜ばれることなのですよ、というのがペテロの言っていることです。

私は、いろいろな方から相談を受けます。そこには、いろいろな不当な扱いについての苦しみの相談も、多くあります。その時に、私が心に抱いている思いは、ここでペテロが言っていることです。不当な扱いを受けると、何か自分が悪いことをしてしまって、そのために罰を受けているのか？という思いが頭をよぎります。人は完璧ではないですから、いくらでも落ち度は見つかりますし。けれども、明らかに自分の犯した罪のゆえに、苦しんでいるのでなければ、そのような思いは払しょくしていいのだよ、という励ましの言葉を語ります。

### **3A キリストの足跡 21-25**

#### **1B 正しく裁かれる方 21-23**

<sup>21a</sup> このためにこそ、あなたがたは召されました。

善を行って、苦しみを受けて耐え忍ぶことは、神からの召しなのだとということです。えっ、何でこれが召しなの？と思うかもしれませんが、しかし、私たちはキリストに結ばれた者であり、その栄光にあ

ずかるように約束されていますが、キリストの苦しみにもあずかっているのです。(ロマ 8:17)

<sup>21b</sup> キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。

キリストは、私たちのために死んでくださった方だけではなく、私たちが召しに応えるために、模範となってくださいました。その苦しみに、私たちが歩むべき足跡があります。

<sup>22</sup> キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。<sup>23</sup> ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。

一つに、罪を犯さなかったこと、口に欺きがなかったことです。奴隷であれば、罪は日常茶飯事、嘘の証言をすることも日常茶飯事だったでしょう。その中で苦しみを受けていました。けれども、イエス様を見るならば、罪を犯さないで、真実を語る中で、苦しみを受けられました。

もう一つは、仕返しをしないということです。そして、裁きは正しく裁くことのできる神にお任せになったということです。私たちが、苦しみや不当な仕打ちを受けても、前に進むことのできる原動力は、主は必ず報いてくださるということです。正しく見ておられる方がいるということです。復讐は主に任せます。そうすることによって、私たちは自分に召されたこと、つまり善を行うことに集中することができます。相手がどう出ようが、主にあって行うことは変わりません。

## 2B 義に導かれた方 24-25

<sup>24</sup> キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。

主は、私たちのために罪を負われました。それは、罪から離れて義のために生きるためです。そして、打ち傷のゆえに、私たちは癒やされました。これは、神の示された恵みですが、私たちが、キリストのうちに歩む時、人々のための執り成しによって、主に出会うことができます。

<sup>25</sup> あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり 監督者である方のもとに帰った。

羊のようにさまよい、けれども、たましいの牧者、監督者のところに戻ってきました。この恵みを人々に、祭司として分かち合うことができるのです。私たちの、キリストのゆえに受ける苦しみであっても、その中で従っていくことによって、周りの人々も、たましいの牧者、監督者のもとに帰ることができます。このようにして、私たちは召しを全うします。